

所感

はいぶつきしやく

廃仏毀釈と神仏分離令

宮下良明

(会員 佐伯市古江区)

仏法を廃し、釈尊の教えを毀却きやくすること、明治元年(一八六八)神仏分離令が出され、これに伴って神社と仏寺との争いが起こり、さらに寺院の仏具・経文等の破壊運動に発展した。(「広辞苑」より)

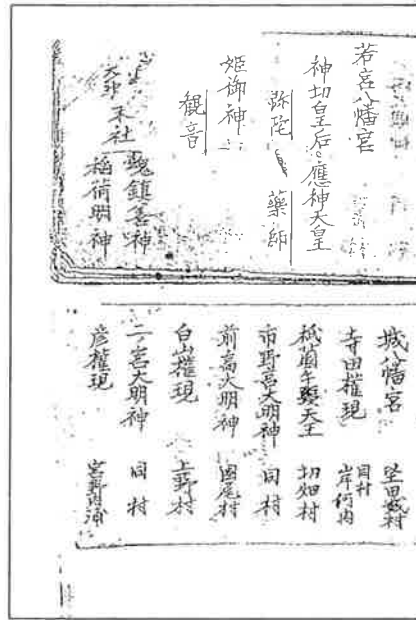
本題の文言が生まれた経緯には、神仏一対「神仏混淆こんぶこう」として奈良時代より長く続く日本民族信仰上の歴史に対して、明治新政府が神仏分離令と云う政令を発動した事に始まり新たに出来た文言で、全国の寺院は大打撃を被る事に成る。

神仏分離令は維新政府が天皇の神権的權威確立の為に取った宗教的政策で、神社の佛像、仏具等を取り除かせた。それ以前の神社は神仏習合で社務は僧職が兼務していた。各所の神宮寺は其の良い例で、神社には本地仏が

あり、例えば伊勢大神は大日如来が本地仏とされ、熊野三所権現の本地は阿弥陀如来、また南無八幡大菩薩と信仰されていたのは歴史上の事実であった。

証左として、佐伯藩政史料「御領分中寺社記」を参考史料として掲げられる。(史料寺社記一部)





いづれにせよ神仏分離令により、権現、明王、午頭等の仏教語に依る社名は廃止され、神社名に統一された。この政令が基で大打撃を被った寺院の一例を挙げると、奈良興福寺の管理する春日神社は、仏具、経典をはじめ多くの什器^{しよく}宝物は四散、五重塔はわずか二五〇円で売却された。三重塔もまた、ただの三〇〇円で売却す前信徒によつて、かるうじて取り止めたと云う、興福寺は一時廃絶同様の憂目^あに遭つた歴史上の悲劇が起きている。

全国の寺院も例外ではない。長野、薩摩、富山等多くの寺院は焼却または廃絶され、梵鐘、金仏等は没収、大

砲武器の鑄造材料とされたと云う。「日本歴史20」より）
 県下の寺社も分離され仏教遺産は神社内から姿を消した事は云うまでも無い。また日本固有の山岳信仰の面影を濃く伝える修験道も宗教として消滅、山伏の多くは天台宗（本山派）・真言宗（当山派）の僧職或いは神宮祈禱師の道に付いてゆく。

更に神社境内の庚申塔、宝篋印塔、五輪塔等の石造仏は撤去させられた。首の無い石地藏尊^{ぼんぼ}が方々に散見されるのも廃仏毀釈の影響によるものと思ふ。

この政令に依つて日本中、信仰上の問題に歪^{ひず}みが生じあわや暴動寸前に驚いた政府は直ちに仏教を積極的に保護する政策に転向する事になったのである。

明治新政府が神仏分離の政策を取った背景には、鎌倉幕府以来南北朝・足利政権・戦国・徳川幕府と約七〇〇年の永きに亘る武士政権が時代の流れ、尊王論に抗しきれず崩壊、徳川十三代慶喜^{よしのぶ}の大政奉還で神国大日本帝国の国名となった結果オーバーラップして、廃仏毀釈に発展していったものと判断される。最大理由の一つに徳川二六〇年の権現崇拜が行政上の邪魔になったものであるう。

権現とは、仏・菩薩が衆生を救う為に、種々の身や物を権に現わすこと、仏が化身して神として現われる。

東照権現、徳川家康の尊称「広辞苑」より家康が神君と呼ばれた裏には、源氏代々の称号「征夷大將軍」の位を欲するの余り、新田義貞末流、吉良家より源氏の系図を譲り受け本来の系統松平氏を廢し、八幡太郎義家流に替えた経緯は史談一八九号で既に述べた。いずれにせよ征夷大將軍、東照大権現の呼称は明治維新を境に消え去って行く。

以上神仏分離令による一連の理由を思いのまま少述した。日本帝国の初見から早くも、明治四年（一八七二）廢藩置縣と行政が代るなかで佐伯では藩を廢し佐伯県となり更に十一月大分県に所屬、毛利十二代高謙公は大名から政府の行政官となり、藩士は各地域の用務員或は帰農し自立の道を歩んで行く。五年には大小区制度により、大分県を四大区に分けその下に小区を設置、当佐伯村は四大区二六小区となった。しかしわずか六年後の十一年大小区制を全廢、新たに郡町村制を公布、海部郡を南北二郡に分割、同六年一月、早くも制度として徴兵令を發布二〇才の男性に兵役の検査を義務付けた。このように

明治前半には次々と政状は移り変わって行く。後半になると国内の政争から国外の戦争へと危険な政策に発展して行く。

一、明治二七年七月、日清戦争が始まる。戦勝国となつた日本帝国は台湾を支配。

一、明治三七年、日露戦争が起り、樺太の南半分、千島列島一部が日本領土となる。

一、明治四三年、日韓合併、植民地とした、その立役者伊藤博文は「ハルピン」にて暗殺される。

一、大正三年（一九一四）第一次世界大戦が勃発。戦勝国の一員日本帝国は独逸の支配下にあつた青島、南洋群を委任統治する。

一、昭和六年（一九三一）満州事変が起る。満州の事実上の支配権を握る。

一、昭和十二年七月、北京郊外盧溝橋で日本帝国軍・中国軍が衝突、日中戦争が勃発、第二次世界大戦に発展。

一、昭和十六年、大日本帝国海軍はハワイ真珠湾を攻撃、太平洋戦争の引き金となる。

一、同二〇年八月、広島、長崎に原子爆弾が投下され世界唯一の被爆国となる。

以上大日本帝国は、数百万人と云われる膨大な犠牲者を出し敗戦国となった。

明治維新以来敗戦までの八〇年、戊辰・西南両国内戦争を初め、十年に一度と云う海外の戦争を体験する当時の国民の多くは軍国主義者の政策に従わざるを得なかったのである。

おわりに、神仏分離令に始まり廃仏毀釈なる文言を作り上げ不滅の神国と云う思想を国民に植え付けてきた軍国主義者による明治以来の歴史は、第二次世界大戦を最後に廃土と化した日本列島の姿を残して終った。

戦後国民の英智の基、自由にものが云え、平和な日本を築き上げてきた六〇年後の今日、また怪しい雲行きになり始めたのではないか。その一つに佐伯海上自衛隊の基地昇格論が云々され初め、「佐伯港港湾計画図」(参照)、また最近の世情を思う時、膨大な国税を投入、大國に追従して自衛隊を遠い中東の國に派遣、無益の戦争に加担し罪の無い多くの子供達を殺している暴挙は決して許せるものではない。何時か来た道に迷い込んだと思う此の頃、疑うのは筆者だけの取り越し苦労であればそれに越した事は無い。悲惨な戦争は懲り懲りである。

「参考文献」

- ・日本史研究「笠原一男」・日本史辞典「角川」出版
- ・広辞苑「新村出」編 御領分中寺社記「土屋亦兵衛」
- ・日本の歴史(20) 太平記「兵藤裕己」著 外

